2023_1220「針葉樹とオーロラ（写真）」日々の理科 3422 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

スウェーデン北部の北極圏の北緯 67 度付近では、主な植生は針葉樹林と沼沢地（湿地と池塘）です。オーロラはどんな風景でも映えますが、やはり針葉樹林の上に現れたものが、一番北欧らしい景観になるような気がします。

真冬の北極圏を旅行していると、いろいろなことに気づきます。夏の間に草原や湿地帯になっていた場所は、一面の雪原や氷原で風も強く、時には－40 度以下にもなります。そんな寒い日は大抵は快晴で、すばらしいオーロラに出会うチャンスも多いです。開けた場所では-40 度でも、森の中に入ると風もなく気温も－30 度から－25 度に上昇します。経験上何もない雪原よりも、森の中のほうがずっと暖かく、オーロラ観望にも適しています。

しかし森の中では「怪現象」にも出くわします。気温が－20 度を下回ると、森の奥から不思議な音が聞こえることがあるのです。「カーン」と何かを強く叩くような音に聞こえることもあれば、何かが「メリメリ」と避けて雷のような音に聞こえることもあります。これは実は樹木の幹が裂ける音で「凍裂」といいます。あまりの低温に木材内部の水分までが凍って膨張し、材そのものを裂いてしまうのです。そんな怪音も、真冬の北極圏ならでは現象と言えるでしょう。

（2023 年 12 月中旬／スウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス／東京から遠隔観測）